◆飛鳥池東方遺跡の調査—第86次

1　調査の経緯と概要

本調査は、奈良県が計画している万葉ミュージアム建設に伴う事前調査である。調査地は飛鳥寺の南東方に位置し、飛鳥池の東岸をなす丘陵と、飛鳥坐神社南の丘陵に挟まれた、北西から南東へ遡る谷筋で、岡寺の北側から下る谷を主とし、これに小原の集落から下る谷が合流している。谷川はすでに整理され、谷の西寄りにコンクリート製開渠の農業用水路として整備されている。調査地は全て水田で、前年秋まで耕作されていた。

調査対象面積は約6,500㎡で、ミュージアム建設予定地の東半にあたり、建物外構の盛土による造成と、既存用水路の付け替えが計画されている。水路付替工事以外は盛土造成となるため、遺構面の確認と谷の堆積状況の把握を目的としたトレンチ調査とし、要所に８箇所のトレンチを設定して発掘調査を行なった（図28参照）。発掘面積は合計1,112㎡、調査期間は７月７日から11月11日である。各トレンチの面積と調査期間を表８に示す。

本調査については、飛鳥池遺跡の調査とあわせて、万葉ミュージアム関連の報告書の刊行が予定されている。詳細報告はこれに委ねることとし、ここでは各トレンチにおける主要遺構と出土遺物の概要を述べる。

2　遺　構

1トレンチ

敷地東端の水田（H=111.3m）に、国土方眼方位に沿って設定した南北45m、東西4mのトレンチである。

基本層序は耕土、黄灰色粘質土（床土）、瓦礫層（遺物包含層）で、これを除去した暗灰色土面で遺構検出を行なった。遺構面高は110.5～111.1mである。

調査区の南端から９mまでは瓦礫層はなく、灰褐色砂質土面（H=110.8m）で、耕作にともなう溝のみを検出した。その北側の幅８mは流路の堆積で、東へ遡る支流SD001が、ある時期にここを流れていたと推定され、４トレンチ検出の流路SD010へ合流するとみえる。やはり瓦礫層に相当する土層はなく、黄灰色粘質土以下は、灰褐色砂質土、茶灰色砂質土、暗褐色砂質土、灰色砂礫と堆積し、暗褐色粘土層（H=110.4m）を確認したが、底まで掘り切っていない。流路の北岸には拳大の礫が南西下がりの勾配をもって面的に検出され、あるいはこれが護岸SX002であった可能性もある。

SX002の北には、暗灰色土が南西下がりの遺構面を形成している。暗灰色土は遺物を含んでおり、７世紀中期以降の整地土と考えられる。

掘立柱建物SB004　暗灰色土の遺構面が比較的平坦な面をなす、トレンチの北端近くでＬ字形に並ぶ柱穴４基を検出した。南北棟掘立柱建物の南西隅部で、トレンチ東方へ続くと考える。北で東に37度の振れを測り、柱間寸法は桁行８尺、梁間９尺程である。柱掘形はおおむね１m角の隅丸方形で、残存深さ0.8mであるが、南東の柱穴は深さ1.1mと特に深く、これが身舎の隅柱で、北に３基並ぶ柱穴が庇の柱であった可能性もある。南から１間目の柱穴に柱根が残っており、残存長100cm、残存径27cmで、径９寸程の円柱に復原される。

小穴列SA005　SB004の北西で、建物と直行方向に並ぶ小穴列。１トレンチ北西の２トレンチまで、４間分を検出した。直径30cm程の円形で、５～６尺間隔で並ぶ。小規模な塀であろうか。

2トレンチ

１トレンチと同じ水田で、１トレンチの北西に接する形で国土方眼方位にあわせて設定した、南北25m、東西２mの調査区である。基本層序は１トレンチと同様で、

トレンチ	大-中地区名	面積	調査期間	トレンチ	大-中地区名	面積	調査期間
1	5AKA-A、5AME-F	181m²	7.25～10.27	5	5AME-F	75m²	9.12～10.23
2	5AME-F	50m²	7.29～10.28	6	5AME-F	303m²	8.20～11.11
3	5AME-E・F	91m²	8.06～ 8.25	7	5AME-E・F	64m²	8.26～ 9.05
4	5AKA-A	86m²	7.09～ 9.02	8	5BAS-M・N	262m²	9.03～11.05

表8　調査面積と調査期間

暗灰色土が北西下がりの遺構面をなすが、調査区北端から南３ｍでは暗灰色土が残らず、褐灰色砂面となる。遺構面高は110.6～110.9ｍである。１トレンチから続くSA005のほかに、トレンチ西辺に沿って複数の小穴があるが、間隔が不揃いで、遺構としてはまとまらなかった。

礫群SX006　トレンチ南端から８ｍ付近の礫群。拳大～人頭大の礫が集まるが、時期・性格とも不明である。

３トレンチ

２トレンチ北西の水田（H=110.9m）に設定した、東で北に振れる南北５ｍ、東西18ｍの調査区である。

基本層序は耕土、床土、青褐色粘質土、黒灰色砂質土（遺物包含層）で、これを除去した茶褐色砂礫面で遺構検出を行なった。茶褐色砂礫層は遺物を含まず、遺構面高は北西下がりで109.7～110.2ｍである。２トレンチ遺構面から１ｍ程低く、建物・塀などは検出されなかった。土層は耕作土の堆積が厚く、早い時期に耕作目的で削平されたらしい。トレンチ中央の北寄りで南北５ｍ以上、東西７ｍの広く浅い土坑SK007を検出した。（長尾　充）

４トレンチ

１トレンチ西の一段低い水田（H=111.0m）に設定した北で西に振れる南北25ｍ、東西６ｍの調査区である。基本層序は耕土、黄灰色粘質土（床土）で、H=110.6m以下はトレンチ全体が流路堆積となり、顕著な遺構面は検出できなかった。この流路SD010は現況の用水路に継承されると考えてよい。流路上層ではトレンチ南東隅から北西方向に礫が列をなし（H=110.0m）、平安時代前期頃の流路東岸SX009と推定される。これより古い時期の岸は確認できていない。トレンチ中央でH=108.9mまで掘り下げたが、流路底は確認できなかった。中層以下の流路堆積は暗灰色粘質土、暗灰色砂と有機質を含む暗褐色粘質土が互層をなしており、拳～人頭大の礫が混じる。堆積状況からみて、東岸は古い時期にはトレンチより東方にあり、堆積の進行につれて西に寄って来ているようである。流路堆積の下層上部（H=109.3m）から７世紀末頃の土器が出土する。またトレンチ中央部で北に急に下がる堆積が認められた。明瞭な岸部は確認されなかったが、１トレンチ検出の流路SD001はこのトレンチ付近でSD010と合流するらしい。

５トレンチ

４トレンチ北の一段低い水田（H=110.3m）に設定した、東で北に振れる南北5ｍ、東西15ｍの調査区である。

基本層序は耕土、床土で、トレンチ西半ではさらに黄灰色粘質土、赤灰色粘質土が堆積し、これを除去すると暗灰色土が北西下がりの遺構面をなす。遺構面高は109.6～110.0ｍである。掘立柱塀５条をそれぞれ柱穴３基ずつ、２間分を検出した。これらは全て６トレンチに連続しているので、次項に記述する。

６トレンチ

５トレンチから北へ一段下がった水田（H＝109.8m）に設定した調査区で、当初南北22ｍ、東西５ｍを設定、その後西へ５ｍ幅を拡張、主トレンチとした。西方へさらに２回の拡張を行ない不整形なトレンチとなっている。

層序は５トレンチとほぼ同様であるが、トレンチ南端から８ｍ付近までは、暗灰色土が削平されており、暗青灰色砂質土の自然堆積上で遺構検出を行なった。西拡張区は暗灰色土がなく、小礫を含む灰色砂となり、４トレンチで検出した流路SD010は本トレンチより西の丘陵沿いを南東から北西に向かって流れていると考えられ、その東岸へ向かって緩やかに傾斜する。５・６トレンチの遺構は基本的には、この流路SD010の方向に規制されている。遺構面高は109.1～109.6ｍである。

主トレンチ西辺ではこの傾斜を整地した黄色土を確認した。東端は高さ15cm程の段差SX017となる。北で西に37度の振れをはかる直線状で、南端で西にほぼ直角に屈曲する。整地土は最大厚25cmが残り、北へは調査区外まで延びる。西側は削平を受けており、幅約2.2ｍを確認するにとどまる。流路寄りの軟弱な地盤を掘削し、黄色土で整地したものと考えられる。

主な遺構は素掘溝２条、石組溝１条、掘立柱塀６条で、このうち塀５条は５トレンチから連続する。

斜行溝SD018　トレンチの中央を北東から南西に下る溝である。整地にともないSX017で切られるが、トレンチ西方の流路SD010に通じていたものと考えられる。埋土は灰色砂で、東の丘陵からの排水路であったのだろう。

石組溝SD019　SX017の南東隅から西へ延びる石組溝で、拳大以上の石を用いる。現状、内法で幅６～14cm、深さ６～18cmで、延長7.5ｍが残り、末端で北西へ屈曲する。西から4.5ｍは削平のため側石を失い、底石のみが残る。

本来は、より東から延び、塀の内側の排水に使われたと推定するが、どの時期の塀に伴うかは確認できない。

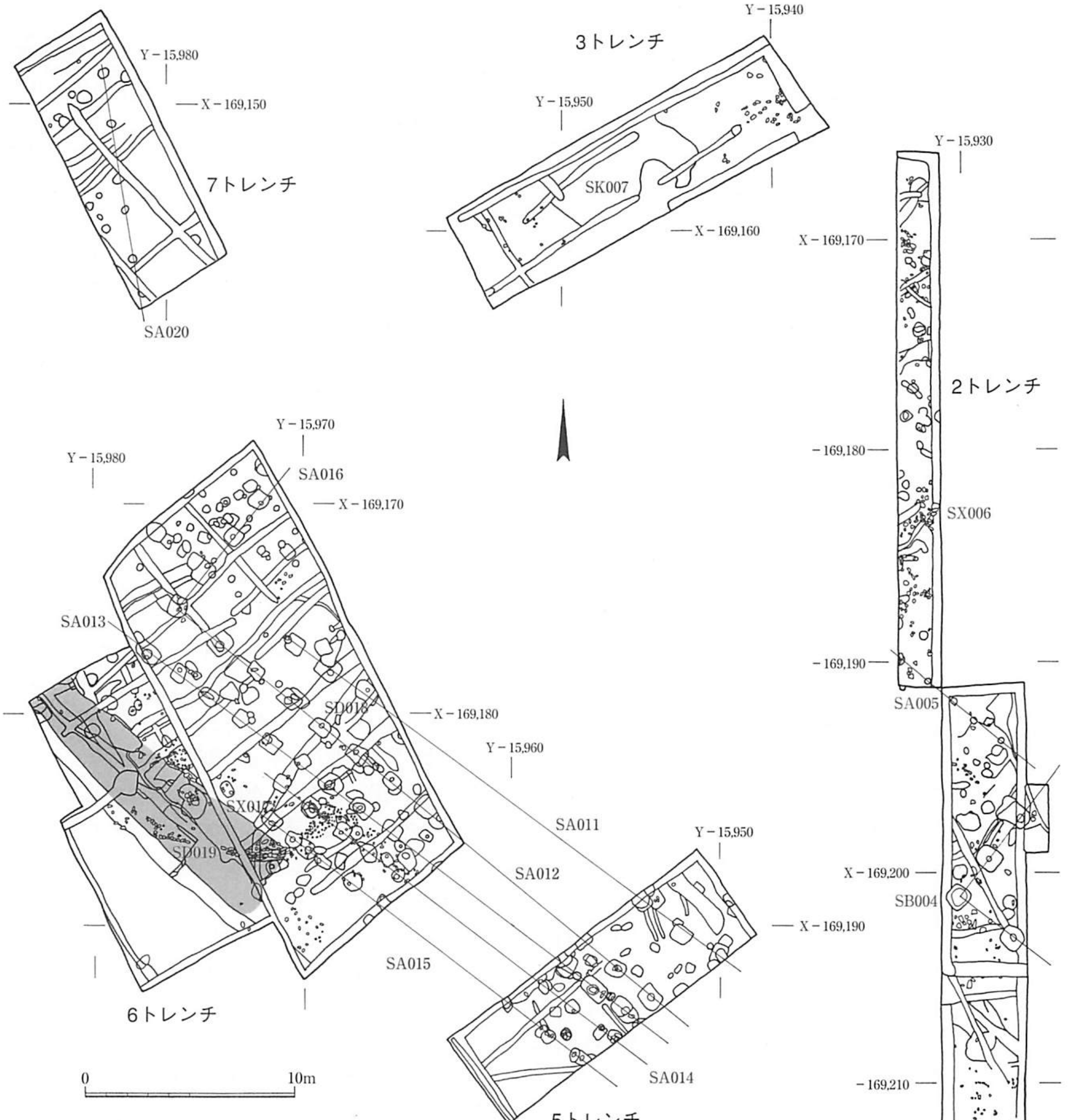
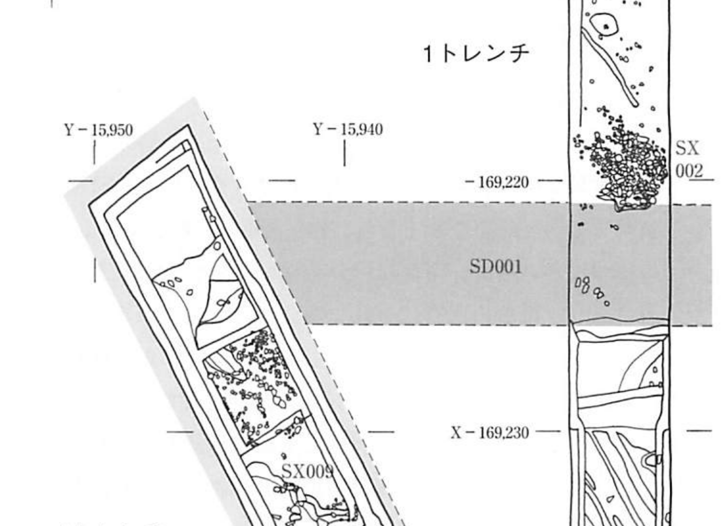


図50　第86次調査遺構図１　1：300



底石の一部には天理産凝灰岩質細粒砂岩製の磚が使われていた。

掘立柱塀SA011　トレンチ東端の南北塀で、北で西に36度の振れを測り、流路SD010の方向に規制されるとみえる。６トレンチで２間、５トレンチで２間分を検出、トレンチ間の未確認部分も含めれば12間以上となる。柱間は６～９尺と不揃いである。

掘立柱塀SA012　SA011の西方約2.5mの南北塀で、北で西に39度の振れを測る。６トレンチで８間、５トレンチで２間分を検出し、未確認部分を含めて14間以上となる。北端にSA016が直角に取り付き、L字型の掘立柱塀になる。柱間は北端で９尺、以南は７尺程である。柱穴の掘形は塀の方向に長い１×0.7m程の隅丸方形で、残存深さ0.7mと深い。

掘立柱塀SA013　SA012の西方約2mの南北塀で、北で西に37度の振れを測る。6トレンチで11間、5トレンチで2間検出しており、さらに南北に延び、16間以上になる。柱間は6尺。柱穴は一辺1m程の隅丸方形で残存深さ0.4～0.5mである。

掘立柱塀SA014　SA013の西方約1.5mの南北塀で、北で西に37度の振れを測る。6トレンチで4間、5トレンチで2間を検出し、未確認部分を含めて10間以上になる。柱間は6尺、柱穴の掘形は不整形で、径0.7mとやや小さく、残存深さ0.3mである。

掘立柱塀SA015　SA014の西方約1.5mの南北塀で、北で西に37度の振れを測る。6トレンチで4間、5トレンチで2間を検出し、未確認部分を含めて9間以上になる。柱間は5～8尺と不揃いである。柱穴の掘形は不整形で、径70cm程とやや小さく、残存深さ0.6mである。6トレンチ南から1間目に残る柱根は、残存長40cm、径13cmである。

掘立柱塀SA016　SA012の北端に直角に取り付く東西塀で、西で南に39度の振れを測る。4間分を検出し、トレンチ東方へ延びる。柱間は西端8尺、その他6尺で、柱穴掘形は一辺0.8m、残存深さ0.7mである。

7トレンチ

6トレンチ北の水田（H=109.3m）に設定した、北で西に振れる南北13.5m、東西5.5mの調査区である。

基本層序は暗褐色粘質土（耕土）、灰色粘質土、黄灰色粘質土（床土）、黄灰色粗砂、褐灰色粘質土で、これを除去した赤褐色砂質土ないしトレンチ南西隅部では暗褐灰色粘質土面で遺構検出を行なった。遺構面は北下がりで、108.8～109.0mである。

SA020　トレンチを南北に横切る小穴列。直径40～60cmの6基を検出した。間隔は1.5～2.5mと不揃いである。耕作溝の方向とは一致せず、性格不明である。

（水戸部秀樹）

8トレンチ

調査対象地の北西隅の水田（H=108.1m）に設定した、北で西に振れる南北20m、東西8.5mの主トレンチと、その東辺北端から東方へ延ばした幅3m、延長31mのサブトレンチからなる調査区である。

基本層序は、暗褐色砂質土（耕土）、暗灰褐色砂質土、褐色砂質土（床土）、褐灰色粘質土（遺物包含層）で、これを除去した褐灰色砂質土面で遺構検出を行ない、柱穴等を検出した。遺構面高は107.5～107.7mで、この遺構面はサブトレンチの東端から10m付近まで続き、以西は平安時代後期まで遡る水田面（H=107.2m）となる。

図51　5・6トレンチの掘立柱塀　北から

主トレンチでは、トレンチの西辺と、トレンチのほぼ中央を東西に横切る水田畦畔があり、主トレンチ東辺近くにも南北方向の小畔を挟んで、サブトレンチへ18m程続く、計3面の水田を検出した。また主トレンチの北端とサブトレンチでは、水田下層の調査を行ない、平安時代から7世紀中期に遡る流路を検出している。

なお第84次調査で検出した石組方形池SG30から北東へ延びる石組溝SD31を延長すると主トレンチ北西隅にかかるが、このトレンチでは検出できていない。SD31は北へ屈曲するか、あるいは平安時代までに流路SD010で撹乱されているものと考えられる。

水田畦畔SX021　主トレンチの西辺に沿って検出した水田畦畔。黒青灰色粘質土で、幅0.6m以上。

水田畦畔SX022　主トレンチ南辺に近い水田畦畔。暗灰色粘質土で幅1m以上。SX021に接する部分は幅0.4mの砂の堆積があり、水口SX023と考えられる。

水田畦畔SX027　主トレンチ中央を東西に横切る水田畦畔。畦幅は0.5～1mで、SX021に接する部分に幅0.5mの砂の堆積があり、水口SX028と考えられる。

水田畦畔SX029　主トレンチ東辺の北半で検出した南北方向の水田畦畔。幅0.8mで、SX027との間3m程が砂

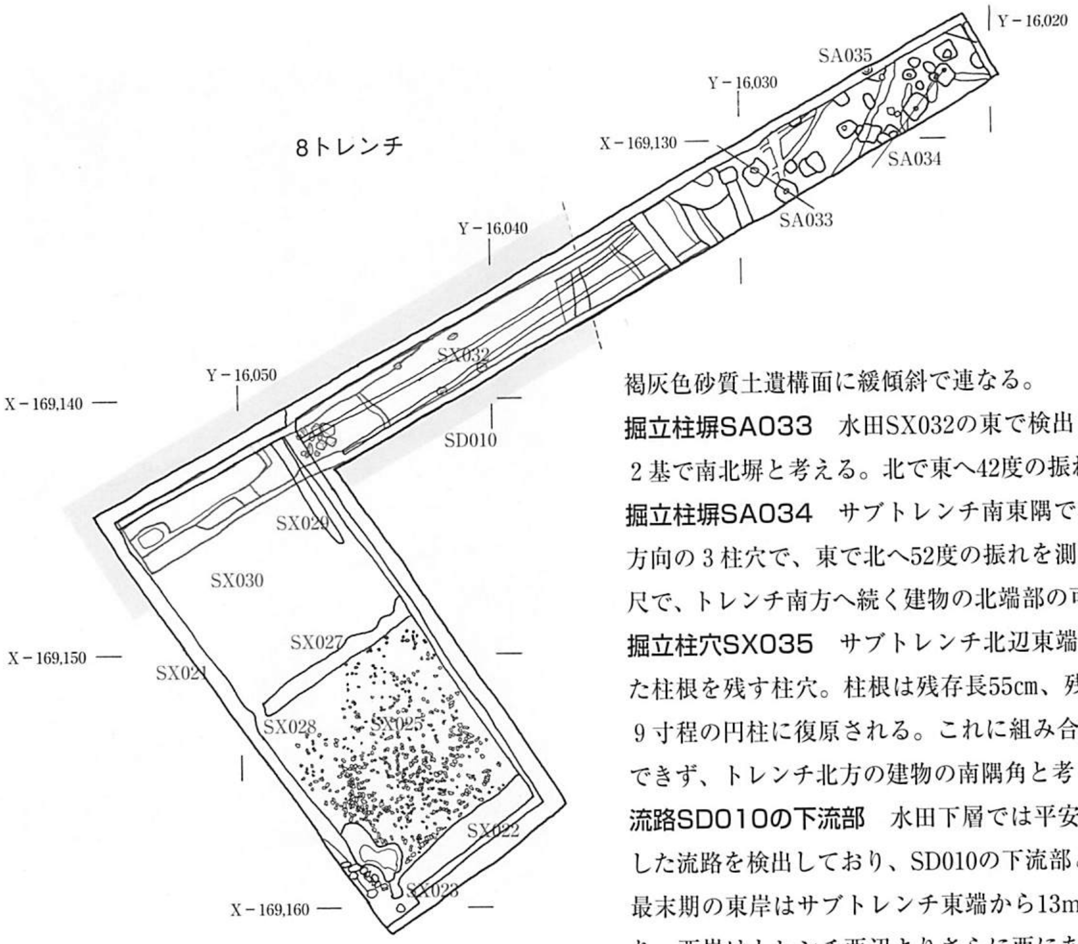


図52　第86次調査遺構図2　1：300

の堆積で途切れ、小畔であった可能性が高い。

水田SX025　主トレンチ南半の水田で南北7.3m、東西は4.8m以上となる。出土遺物から平安時代後期には水田化していたと推定される。水田面では、流入した砂の堆積により、ヒトおよび偶蹄目の足跡SX026を多数を検出している。牛耕が行なわれたことを示すものと考えられるが、足跡の配列は不規則で重複が多く、耕作方向等を検証するには至らなかった。

水田SX030・SX031　主トレンチ北半の水田で、上層のSX030は南北10.5m以上、東西7.0m、小畔SX029を挟んで東にSX032が続く。下層のSX031の段階では、小畔SX029の西1.7mに畦があり、耕作の過程で東方へ拡大したことがわかる。

水田SX032　サブトレンチ西半の水田で南北2m以上、東西はSX029から東20mまで明瞭な畦畔がなく、東側の褐灰色砂質土遺構面に緩傾斜で連なる。

掘立柱塀SA033　水田SX032の東で検出した掘立柱穴2基で南北塀と考える。北で東へ42度の振れを測る。

掘立柱塀SA034　サブトレンチ南東隅で検出した東西方向の3柱穴で、東で北へ52度の振れを測る。柱間は6尺で、トレンチ南方へ続く建物の北端部の可能性もある。

掘立柱穴SX035　サブトレンチ北辺東端近くで検出した柱根を残す柱穴。柱根は残存長55cm、残存径25cmで、9寸程の円柱に復原される。これに組み合う柱穴は検出できず、トレンチ北方の建物の南隅角と考えられる。

流路SD010の下流部　水田下層では平安時代まで存続した流路を検出しており、SD010の下流部と考えられる。最末期の東岸はサブトレンチ東端から13m付近まで広がり、西岸はトレンチ西辺よりさらに西にあると推定される。サブトレンチ東端から18m付近に1m程の間で1.1mと急激に落ち込む部分がある。当初の東岸と考えられ、人為的な掘削をうけた可能性が高い。この底近くに残る古い堆積からは7世紀中期の遺物が出土している。ここから西へ岩盤起源と考えられる淡青灰粘質土の地山が平坦に（H=105.6m）9m程続いた後、さらに0.3m程落ち込んで最深部となる。底は岩盤起源と考えられる青白色粘土である。

堆積は上から、暗灰色シルト、暗青色砂質土、暗茶褐色砂質土、黒灰色粘土、暗灰色粘土、淡灰色粗砂、褐白色粗砂礫、褐灰色砂礫で、最深部は底近くに長径0.4～0.6mに及ぶ大礫がある。最深部から西では拳大までの礫の厚い堆積があり、地山まで到達できなかった。

3　遺　物

遺構面直上の瓦礫層および、流路SD010の堆積中から

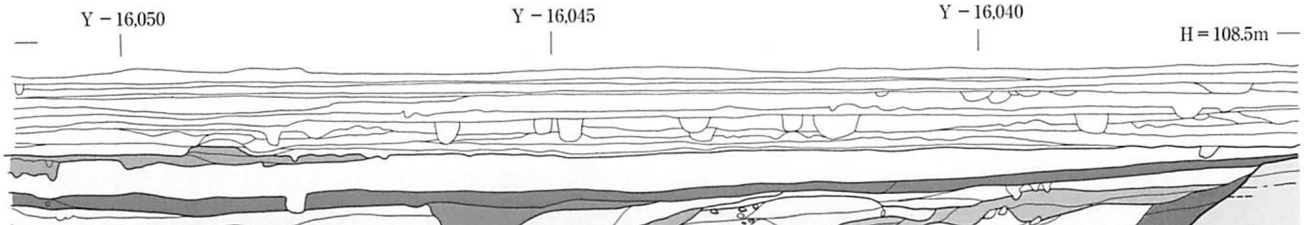


図53　第86次調査8トレンチ北壁土層図（流路部分）　1：100

多種多量の遺物が出土した。現在、整理が進行中であり、ここでは主要遺物の概要のみを記す。

木製品　流路SD010から曲物底板片および折敷底板片が出土した。曲物底板は直径13.4cm、厚0.6cmである。折敷底板は長円形で、長軸に沿って割れた半分強が残り、厚1cmで、長径75.5cm、短径は40cm程に復原される。このほか、漆刷毛など工房利用品もあり、飛鳥池工房との関連が注目される。

金属製品　流路SD010からは、鉄釘、銅製太刀鎺（はばき）、刀子吊金具、銅薄板などが出土した。またSD010最深部近くから隆平永宝［延暦15（796）年初鋳］が出土した。そのほか鉱滓、鉄滓なども出土した。

石製品　石鏃、滑石製子持勾玉などがある。また少量ながら砥石も出土している。

岩石　流路SD010で多数の石英塊を採取した。表面は磨滅しており、流路上流から流されてきたとも考えられるが、ガラスの原料として搬入された可能性もある。

また1・6トレンチでは天理産の凝灰岩質細粒砂岩が出土した。酒船石遺跡から出土するものと同質であるが小片で、出土状況からみて二次的に移動したものである。

土器・土製品　縄文、弥生、古墳時代の土器も出土しており、古くから利用された土地であったことがわかる。塀や建物を検出した暗灰色土遺構面を覆う瓦礫層では、藤原宮期の遺物が目立つ。また少量ながら鞴羽口、坩堝、炉壁、溶銅付坩堝片、漆壷などの生産関連遺物も出土しており、飛鳥池工房との関連も注目される。

SD010では7世紀中頃から平安時代までの遺物が出土した。特に7世紀中頃の土師器、須恵器は、磨滅が少なく、良好な資料が得られた。また第84次調査の南北大溝SD05出土の須恵器の火舎と甕に接合するものが、SD010東岸の堆積上層で出土しており、7世紀後葉にこの区域が一体として利用された状況を示すと考えられる。

瓦類　飛鳥時代から平安時代の瓦が出土した。軒丸瓦29点のうち飛鳥寺Ⅰ型式が19点を占める。軒平瓦は飛鳥寺ⅡA型式1点がある。これら飛鳥寺創建期の瓦片が全域から出土する。また流路SD010出土の垂木先瓦が、小墾田宮跡出土品と同笵であることを特記しておきたい。

4　まとめ

谷の地形　現状地形は谷の東側が緩い傾斜、飛鳥池側の西側は急傾斜である。自然流路も谷の中央より西寄りを流れていたと考えられる。谷川は7世紀代には谷の西寄りに整備されており、その東側には南東から北西へ緩やかに傾斜する平坦面が形成されていたことがわかった。

谷の利用状況　この緩傾斜をもつ平坦面では、5・6トレンチで数次にわたって改作された塀を検出した。これらの塀は谷の西寄りに管理された流路と東側の施設との間を閉塞すると推定される。塀は相互に柱穴の切り合いがなく、前後関係が不明だが、おそらくSA011が最も古く、順次西に造り替えて東側施設の空間を広げたものと推測される。またSA012にL字に接続するSA016は区画が細分割された時期があったことを示している。残念ながら区画内施設は確認できていないが、南方の1トレンチで検出した大規模建物SB004の存在は注目される。

建物遺構が未検出で、現状では施設の性格は特定し難い。遺構面上の遺物包含層には飛鳥寺創建期の赤色瓦が多く含まれており、飛鳥寺と関わりのある施設も想定しうるだろう。一方で工房関連遺物も少量ながら出土しており、飛鳥池工房との関連も考慮すべきであろう。

8トレンチでは7世紀中期に遡る流路の存在が確認された。土器は器種も豊富で磨滅も少なく、谷筋での活発な活動を裏付ける。

流路SD010の性格　調査区南西の丘陵の酒船石遺跡では、大規模な造成が行なわれた可能性が指摘され、日本書紀斉明2年（656）条に「廼ち水工をして渠穿らしむ。香山の西より、石上山に至る。舟二百隻を以て、石上山の石を載みて、流の順に控引き、宮の東の山に石を累ねて垣とす。時の人の謗りて曰はく、狂心の渠。」とあるのをあてる説がある。

今回検出した流路SD010は酒船石遺跡の東麓まで遡る可能性があり、8トレンチで検出した東岸は人為的な掘削をうかがわせる状況である。書紀にいう「狂心渠」（たぶれごころのみぞ）との関連が注目されるが、「石上山の石」に相当する天理産砂岩は、SD010からは出土していない。このSD010の性格については、進行中である遺物の分析成果を踏まえた上で検討したい。

なお今回の調査範囲では、平成10年度に工事の施工に先立って、水路施工部分および流路部分の補足調査を計画している。今回の調査で生じた諸課題がわずかでも解明できるよう努めたい。　　（長尾　充、水戸部秀樹）